
悪党の魔法に恋をして！

飛焰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪党の魔法に恋をして！

【Nコード】

N4720K

【作者名】

飛焰

【あらすじ】

突発性異常能力保有者。通称、魔法使い（マナーティスト）。神の成り行きか？ はたまた神が人に与えた試練のようなものなのか？ 発生もどんな能力であるか不明、突然手に入れてしまうもの。人が人ならずものの力を手に入れた時、どう上手く生き抜くか考えるであろう。まるで神のように振る舞える人ものではない力。自分勝手に振る舞うばかりのその力を正義のために使うものなどない。ただの『悪党』なのだ。 コレは私——鞘川幾恵と『悪党』の物語。

† 前編 † (前書き)

前後編にわかれてやす。後編更新は未定。『ダークヒーローッククラブ
コメディ』ここに推参！

十 前編 十

私はあの夜に、この男に出会った。

私が現在何の気なしに視線を送る男、高校過程の3年間同じクラスだというのに一度も話したことがない。すくなくとも私は彼と話した記憶がないし彼が誰かに話してるのも、話しかけられてるのも見たことはない。

窓際の一番後ろの席。彼は毎時間授業中空を眺めている。

出席番号14番、遠山王郁^{とおやま みくに}。身長175、痩せ型で学力は赤点を取らない程度。まじめに授業などを取り組んでいる様子はなく、今日みではノートをとってもいらないように思える。運動神経は並程度。まあ使えなくもないし使えるわけでもな、そんなどこにでもいるレベル。目を覆う程度に伸びた髪は表情自体が少ない彼を余計に不気味に際立たせている。

「さやー？もう、本当にどうしたの？最近」

「あ、ゴメンゴメンちよつとねえー」

私の親友——雨竜桐音^{あめりゅう ときね}、通称『キリ』にハッとして箸でつまんでいた玉子焼きを頬張る。頬張ったときにトロツとした半熟加減に感動し、いい感じに甘くてもう本当に幸せに顔がゆがんでしまう。ああ、美味しい。さすが私、料理の天才——うふふふ♪

とりあえずキリが私の机に広げた弁当を見る。茨城産コシヒカリ100%それを釜で炊飯し体育会系の男子が使うような量にのみ特化された四角く底の深い弁当、そのご飯がきらびやかに輝く米の銀

世界の中央に己の存在感を強調するようにドーンとおかれた、みんな大好き紀州産の梅干が――そう、まるで我らが日本市民なら誰もがしるであろう日の出の国旗のように、悠然とその姿を輝かせていた。

女の子が食うような弁当でなければ量でもない。相変わらずキリはすごいなあ……。キリは特に運動部ではなく彼女が独自に愛好会としている『助太刀愛好会』はさまざまな部活……。女子ソフト、女子テニス、女バス、女子剣道、空手などなどさまざまな練習試合で助太刀として参上しては多くの部活に熱中し練習していた生徒達よりも優秀な成績を収めている。

そんな彼女に憧れる女子は多く、入会しようと試みる生徒も多かったのだが「大人数助太刀がいたって意味ないのよ。喧嘩じゃないのよ?」と笑いながら入会を否定される。彼女自身入会の目的は自分でしかないこともわかっていてやりわりと傷つけないように断つてから余計に同性からの支持は高い。身長も170ぎりぎり行かないくらいと女子としてはそれなりに恵まれる体格で、後ろに細く一本にまとめられた髪は彼女の象徴だ。前髪も綺麗にカットをされていて、キリの小顔とか、ぷにぷにとやわらかいほっぺとか、大きな目の瞳とかのよさが前面に際立っている、スレンダーな体格で、男子からの支持ももちろん高い。

まあ、唯一の欠点が……。掛け算は出来て3の段まで、割り算?なにそれ食い物?な、ちよっとお馬鹿な子なのだ。自分がかわいいとか鼻にかけないし、誰とでもフレンドリーに話しかけ、クラス、学年? いや、学校全体から絶大な人気があるのだ。

「それよりもさあ、サヤ?」
「ん?」

口の中に入れた天才料理人である私が作った玉子焼きを租借しながら何の気なしにキリに否応がわからない返事を返す。玉子焼きを飲み込みキリの方を見ると、キリの視線は――遠山王郁？

「遠山なんだけど」

「はあ！？　なんでここで遠山なの？」

いや、確かに心当たりはあった。私とキリが共通して遠山王郁を意識することなどあの晩のことではない。いや、しかしあの時にキリは酩酊しててフラフラだったし先週のことをよく覚えてなかったじゃないか。なんでよりもよって、そんなことばかり記憶にあるのよ？

少々オーバーなりアクションでキリをちよつと威圧にかかる。あれは少し思い出してはいけないのだ、忌々しい記憶で、尚且つ……遠山王郁の姿なんて。キリみたいないい人に知っちゃいけないんだ。いや、かわつてもらいたくない。それが真意だ。

「い、いや先週の夜――あれってやつぱ」

「あんな時間に遠山がいる理由なんてないじゃない！」

「う、うー……ん」

納得できないといった感じにうな垂れるキリ。すこしは悪いと思っただけどキリと、もちろん私ともだ。でも、助けてくれたのは遠山王郁だ。で、でも、信じられるわけがない、それにアイツは――なによりも……。目を軽く瞑る、目の前に広がった紅蓮、なにが燃やしてはいけないものを焦がしたような鼻につく匂い。脳がグシャグシャになりそうな感覚。軽く目を瞑っただけで、あの日の記憶がよみがえった。

許せないはただの言い訳。ただ、私は信じたくないんだ。アイツらはみんな……ただの悪党なのだから。

「とりあえず、昼休みもおわっちゃうし食べちゃお！」

「そうだね。遠山が魔法使い^{マナ・アーティスト}いなわけないよね！」

力強い、キリの言葉に騒がしく世間話をして盛り上がっていた教室は静かになった。訝しく私達を……キリをみる目と……明らかに侮蔑の目を遠山に投げかける者もいた。それにハツとしたキリは視線を泳がす、追求するような視線がキリに突き刺される。どうにかしないと、そう思い立ち上がるうとした瞬間、誰かが立ち静寂をぶち壊した。視線はすべてそちらに注がれる、当然だ……立ち上がったのは……当の本人。

遠山王郁である。

彼は誰にでも感知できるように大きいため息を吐き捨て教室を出ようとする。そして強く乱暴に踏み込む音、一人の男子が飛び掛ったんだ。もちろん目標は批難するような眼を浴びせられていたキリではない、当然、その拳によって遠山は床に倒れた。そこから馬乗りになり、男子が声を荒げる。

「デメエ、やっぱおかしいと思ってたらそうなのかッ！？」

飛び掛っていった……、宮小路君は柔道の80キロ級の選手、瘦せて特に目立った筋肉のない遠山は成すすべがない。だれも宮小路君を静止するような声をかけない。そう、これが悪党——魔法使い^{マナ・アーティスト}という存在。

突発性異常能力保有者^{とつぱつせいじょうのうりよくほめうしや}、自然的にDNAなど無関係で確立発生す

る、人間ではない“力”をもつ存在のことだ。もちろんこんな長い言葉をいちいち使うわけは鳴く『魔法使い』のように、ありえないことをやってのける事から『魔法』と。神が悪戯に創造した存在とし『アーティスト』という皮肉から『魔法使い』と呼ばれている。

人間なんて所詮は汚い存在だ、人ならざるぬものの“力”を手に入れて“正義のための活動”なんかを考えるわけがない。考えるのはそれを使ってどうやって自分が有利に過ごすかという“利用”。しよせん利用するのは自分の欲に利用をする、やってみたら“力”もって殺した。金がほしかったから“力”を使い強盗をする。利用に利用。そんな汚くなんらかが原因で、もしくは生まれた時から宿す“力”をもった者。それに対する忌みの言葉、それが魔法使い。

世の中の害悪。世界的につかまる能力者より、つかまらない能力者のほうが勝るといふ最悪な治安。そんな今の世の中、親を魔法使いに殺された。そんな人間は——クラスにも、学年にも、学校にも大量にいる。そう、だから誰も助けない、存在自体が悪党であるから……魔法使いだから仕方ない、むしろ足りないくらい。それが、彼らの感想。そして、私もその一人。

そして静かに不気味な雰囲気変わってきたクラス。宮小路君の怒号を聞きつけて野次馬としてかけつけてきた他のクラス。遠山の逃げ道は塞がれた。

「答えろって言うてるんだよッ！」

殴る音が鈍く響く。そうだそうだと賛同するクラス。私ですらとなりで「違う！」と制止させようとするキリの言葉はなんとか聞き取れるぐらいでしかない。ああ、そうだ、今ここで遠山がボコボコにされたらキリまで追求されるんじゃないか？ 仲間じゃないのか

って？ それはさけないといけない。親友は守らないといけない。でも……。今、冷静さを欠いたクラスをどう鎮めれば？

みんなテンションがハイになってるし、言葉が通じるのか？

否。それは断固して否だ。腕力でもなんでも勝てるわけがない。

「うっ……」

どうすれば！？

どうすればいい？ 愚直に進めばいいのか？

「馬鹿か？」

騒がしかった教室がある一転から波紋が広がるように静まり返った。聞きなれない、まるで何事にも冷め切ったような人間味の無い声。クラスの人間とはそれなりに話をしている私は消去法をするまでもなく、その発信源がわかった。口元を不気味に歪ませた、あの男——遠山壬郁である。

沸点に足そうという宮小路君のデコに平手をあて、どこか口元を歪ませて言う。

「仮に俺が能力者だとしてよう」

飛び交う野次を気にせず、遠山は続ける。

「だとしたら俺はすでに後戻りできない『悪党』だ、今更このクラス的全員、そこの外野も……みんな殺したっていいんだ？ お前ら

のいう『悪党』とはそんなもんだ。ほおら、宮小路？ 危ないんじゃないか？ 俺はどんな力があるかわからねえだろ……？ 愚直に怒りに任せて立ち向かうのは、ただの蛮勇でしかないな。死ぬぞ？」

宮小路君がたじろき、一步……また一步と後退ししりもちをつく。単なる能力をもたない奴の脅迫に違いない。そんなのわかりきっているものだ。だけど、だけど……！ 宮小路君がどいたことにより立ち上がったアイツの顔は……何人も鬬り殺したような冷たい笑顔だった。足がすくんだ、私も教室のみんなも。

しろもちをつき遠山を見上げる宮小路はただ震えるだけ。わからない、わかるわけがない。確かに魔法使いは突発でなったりとかもする……。魔法使いにはどの学校も厳しく取り締まっている。特に、この町は。

人間を監視下に置くために端末の設備強化。たいていの事は携帯1つでなんとかなるようなこの町だ、便利な反面にピースペイカーなどをつけている人間は生憎出入りすることは厳しいが。故に機械都市とまで言われている。すべては、魔法使いの早期発見と処分が目的で……。そう、この町で魔法使いが発生しても、“異常な状態”を端末が感知できる。そんな町で、遠山王郁とは少なからず3年ほどの付き合いになる。ありうるのか？

まさかあの日に覚醒したばかり？ だが、もう一週間も前だ。すぐに発見され処分がされていないとおかしい。でも、やっぱり遠山は魔法使いだなんて否定できないよ。あの眼をみたら……！

「ふん」

冷たい笑みのまま、遠山は教室を出ようとする。それを追従する

ようにキリは近づく。そして、遠山の腕をつかんだ。「待って」と掠れた声。彼女の罪悪感が私の重石に……なぜかあった。わからない、なんで？

懇願するようなキリの眼を見て、遠山は言い切った。

「邪魔だよ」

先週と同じくきつぱりとした。否定を。

はあ……。だいぶ遅くなったなあ……。

暗い夜道、視線を腕に巻いてあるお気に入りの腕時計に視線を落とすとともに夜中の2時だ。真昼間の2時に集まり2時だ。ややこしいんで言いなおすと14時にあつまり2時だ。ネオンの灯りで、深夜とは思えないほど明るい夜道を私は、親友であり泥酔し酩酊してるキリをおぶりながら歩いていた。

今日は友達の誕生日ってことでファミレスで昼食をとった後にカラオケで歌いに歌い、酒を飲みに飲み（未成年飲酒であるが、一応ノンアルコールである）。それで無礼講で飲みに飲み、最終的にはキリが酩酊しダウンしたのでお開きになったのである。

それで、私はホロ酔いのいい感じで少し覚束ない足取りのまま、ふらふらと歩いていた。くっ、ノンアルコールとか言っておいてるのにアルコールはいつてるじゃないか！　だ、騙されたぞ……うう、

明日が日曜日で助かったなあ。キリは当然ながら私——さやかわいくえ 鞘川幾恵も
覚悟しなくてはいけないようだ……。

そんな足取りで私は帰路を歩く。キリの家が近いということもあり私が一人で運ぶことになったわけで、はぁおいていこうかなあ？ 私だて酔ってフラフラだ……。うう、少し頭が痛いゝ酔いが覚めてきてるよぉ……。

うう……？ なんか足音が余計に聞こえるような……？ そう気になり振り返ってみるとパーカー、ピアス、サングラス、ガムを租借、そんな明らかにぶっそうな男2人組がいました。はい、私の思考は停止。あきらかにこっちを見てる気がするが無視だ！

「ねえねえ？ かーのじょ」

「酔ってるのお？ 顔が赤いけど？」

追いつかれた！？ ってか、私は一人背負ってるんだから当然か！？ く、くそう！ なんてる罠だ！ って。ええい！ なんか混乱してるぞ！？ なんか危ういぞ私！？ とにかく落ち着け。

っていうかあからさますぎるだろ？ っていうか聞いたことがあるぞ？ 連続暴行魔がいるって——？

……ま、まずい。

「大丈夫？」

半ば笑いながら、サングラスで目が見えないが明らかに目が笑っていないのが読める。マズい。これは、ヤバいんじゃないか？

「だ、大丈夫です！」

強めに言い振り払う。だが所詮一人を抱えて女である身、掴まれた手首に振り払われる。肩を預けていたキリが地面を転がり、私は塀に押し付けられる。

手首が掴まれ圧迫される。まずい、叫ぶべきか？ それは当然だ、だけど声が………出ない？

う、嘘？　なんで？

「俺この子、チョー好みい」

「趣味わりんじゃね？　ばーか。なら俺はお言葉に甘えこの子貰うぞ」

まさか……魔法使い？
マナ・アーティスト　くっ！　抵抗するがいかせん力さは埋まらない。

「いいね？」

耳元で囁かれる事に、背筋に悪寒を覚えた。

「その必死の抵抗」

………！

コイツ………！　やっぱりおかしい！　キリは？　駄目だ酩酊していて抵抗も出来ない。っというか夢心地か？　こんな時に！　おばか！　こんな時にまでおばかをやるなー！　おきーろーキーリーー！

そんな叫びもいかせん声が出ない。いくら男子顔負けの運動能力

があつても2人相手にはきついであろう。元から勝算がない……のか？　くそ、この香水臭い金髪くそピアス野郎を振り払えれば――！

「楽しもうぜ？」

片手で腕を押さえ込まれる、そして背筋に再び悪寒が。空いた片方の手が口に向かって……そして、燃えた。いきなりの事態に驚き悲鳴をあげる私。私はそのまま腰を抜かして地面に尻餅をつく。キリを襲っていた男も事態に気がついてか周囲を見渡す。なに？　やつらの力じゃなかったの？

パニック状態な私はそれに至るまでに分はかかったであろう。消えることのない炎に焼かれながら、異臭が鼻をかすめる。吐き気を促すような断末魔とその刺激臭。飲酒によってそれが加速するが私は持ちこたえて見せた。大きく、深く。そういう息遣いをする事によって徐々に落ち着きを取り戻しながらキリの場所と私の場所をみる。3mは放れているだろうか？　眼と鼻の先の距離だ。

異臭の発信源。つまり私を襲っていた男は消えることのない炎につつまれ、膝を地面につき倒れこむ。全身を包む炎を消そうともがき苦しみのた打ち回る。でも消えない、いくら地面を転げまわろうがその炎は悪人を焼き払うためだけの煉獄でしかない。消えない、だが確実に消えるのはあつた。

「ぐおおおおおおおお……」

「誰だよ！」

苦痛と怒号。煉獄の紅蓮は揺らめく。火力は更に増し男の輪郭が確認できないほ、赤でど覆いつくす。意気消沈し呆然とするもう一

人の男。私は、私たちを助けてくれたであろう魔法使いの神経を疑った。
マナ・アーティスト

絶対にこの2人より異常だ。おかしい……！ 煉獄のような紅蓮は徐々にすべてを静かに焼き尽くす幻想的な海と表現するような、絶海の蒼焰そうえんとなり、中心で微かに確認できる黒ずみは既に叫びすら挙げられない。男の骸を、消し去ろうとするほどに燃えている。転げまわっていた男に動きはなくなっている。

そして、男がどれだけもがいても消えなかった炎は徐々に消えていく。誰かの意思のように、役目を果たした悪魔の炎は消える。

片割れは、1人だった物のその姿を視ることしかできなかった。いや、姿をみていたのではない、ソコに残ったのは人型の黒ずんだ奇妙な痕でしかない。そう、そこに残ったのは、ソレがいたという形跡だけ。私は腰を抜かして立てないことにここまで憤りを感じたことはない。

あの状況、どう見ても私たちを助けたという行為だ。下手にうまくって脅迫されたらたまったものじゃない。私は視線をずらし残った男を視る。だが男は痕を眺めるばかり、もう犯人を見つけることにすら冷めている？ いや、違う。これはさっきの炎と同じ……蒼い炎なんだ。ふつつつと静かに沸点へと昇っていく殺意。爆発はまだこない……？

私は視線をめぐらせる、腰に根性をいれる。キリを連れてどうにか出来れば！ 難易度は高いがそれにか方法はない。マナ・アーティスト魔法使いなんてものは何をしでかすかわかったもんじゃない。故に私は視線を巡らせた、逃げるコースと方法、その最善な方法を探すため。

すると、ゆらりと……街頭に影が動いた。そして出てきたのはフードを深くかぶり顔を隠した黒いローブの……体格的には男。その男は手をかざす、何をするか感づいたその男は、この不気味な男に飛びかかる。人間の跳躍距離じゃない、立ち幅跳びのオリンピックを狙えそうな距離だ、アイツの能力は跳躍？ だから少し距離があったものを一瞬で……？

月夜の暗闇に、右手から指それぞれに蒼焰が凝縮し、パチンコ玉程度に凝縮された玉が作られた。故に後は単純なことではない。直線での跳躍、それを武器にライフルに挑むと同じ。そもそもオリンピック金メダル超えの跳躍なのだ、とうぜん滞空時間と移動距離が長い。故にそれは無謀な蛮勇でしかない。

火の玉は男の右肩にあたり、いともたやすく体と引き離れた。それにつかった玉は3発、残りの2発は苦痛により体勢を崩した男の顔面すれすれを通り過ぎ空中で消失した。灯りを消した蛍のように自然と。

残った片手でなくした部分を抑ええる男。それを見下ろす悪魔。私は立てなくなった体を全力で動かそうと努力する。だが、立てない。瞬間、夜だというのに強い風が髪を凪いだ、そしてそれは黒いローブを着込んだ男のフードも払いのけた。

悪魔の顔。それは——見慣れた顔であつた。

その事実呆けた私は2人の会話が途中から入ってき、最初のやりとりがぜんぜん聞こえなかった。

「命乞いをして……助ける悪党はいるか？」

「ひい！ 思い出した。思い出した！ お前は今、噂になって」

火の勢いは増す。いつから、足を燃やされていたのだろうか？
私はわからなかった。最期に奴らの会話は聞こえなかった。ただただ私は意識が遠のいていくだけでしかなかった。悪魔の所業で、遠山王郁の表情を思い出し、思い出したくない過去とし封印をするために。

出来もしないのに、忘れるため。

遠山王郁が疑惑を抱かれるようになった翌日。教室にはささいな変化が起こっていた。その変化がどういう意味を成しどういう結果に担うのかなんて私が知るはずもなく、その変化は、だが確実に……
…なにかに触れようとしている、そんな感じに襲われた。

朝――、遠山が教室に入ってくる。それは当然のことであって問題はなかった。だが、問題はある、日常の光景ではないその光景。遠山の隣に立ち愛想良く笑いながら、しかし遠山にいないと認識されてるように無視されている、雨竜桐音がいた。

波紋のように目撃者からその異常な光景に黙り、首でその最後まで確認する。だれもが予期していない事態ゆえにその流れが自然となった。遠山が席に座ってもまだ来ていない前の席に座って躊躇なくはなすキリを見て。私は、遠山に不思議な憤りを覚えた。

誰もが憧れる、雨竜桐音。それをココまで無視すること？ いや、友達が笑顔で話しかけているというのに存在してない風に取り扱う

遠山が許せないでいた。友達を侮辱されているような感覚。そして、遠山なんかの近くにいるキリを心配する私。それがぶつかり合ってた。

昼休み。私はいつもと同じくキリと机を向かい合わせて昼食をとっていた。

「キリ、ミートボールあげるから遠山は気にしないでおきなさい」
「私をそんなすっぱらしいオカズで買う気!？」

ちえ、箸が伸びかかった瞬間、気がついたか……!

「昨日のことを気にしてるの? アレは——」
「違うつてサヤ。私は……なんていうのかな?」

何かを言いよむサヤ。昨日のことを気にしていない? なら先週の何か? だが先週のことになるならキリの行動力ならその次の日から遠山に何かしら話しかけるはずだ。いや、それ以前にあれほど……立てないほどに酩酊していたキリが何故、アレが遠山壬郁だとわかつたんだ?

そんな素朴な疑問は大きな疑心になる。

キリは、何かをしっているんじゃないか? そんな気になれた。

「そんな事より私、思うんだ!」
「ちょ! キリ! まじめに話してるんだから話をかえないでつてば」

強く何かを言おうとしたキリに私は釘を刺す。少し表情を曇らせたがやっぱりそれは譲れないにかがあった。そもそもキリが何か

を隠してるといふ大きな疑心を親友としては気持ちがいいものではなく晴らしたかったのだ。

私の眼力でキリを黙らせていると、キリは遠山の席を見ながら一枚の手紙を渡した。見覚えのある紙だ、口の周りが赤いメルヘンなクマさんがワンポイントに描かれたその紙の文面。それ見ると至ってシンプルな内容であった。

『この学園にいる魔法使いで夜に出没する炎使いの魔法使い……』
ナイトメア・ハート
『黒衣の魔炎』がいるはずだ。彼を探し私を殺してくださいと頼んでください。 2年E組 北川恵』

……遠山に、殺して欲しい……？

そう、シンプルに自分の殺害の依頼である。困った風にキリはため息を吐いた。それが入っていたであろう日付は……わからないかやっぱし。だが、確実に今週中には入っていたんだ。そういう憶測がたつ。もちろんこんなふざけた依頼はキリは受けないであろう。だが、だったら、なんでキリは遠山と話していたんだ？

ちらりとキリは見る。曇った表情で頼りなさそうに顔だ。あんなにも頼りにされてるキリのこの顔はおそらく誰もが見たことはないであろう。それもそうであるのだが……なにかが頭の中でわだかまりになっている。

「……遠山はなんであんなことをしてるんだろっね……？」
「……決まってるでしょ？」

そんな応えは明白だった。遠山王郁は――

「悪党だからだよ」

私が遠山に対する、正直な言葉。悪党を殺す悪党。あれは慈善事業なんかじゃない。ただの、自分の私利私欲の快樂殺人だ。

「……そう、かな？」

煮えきれない、そんなキリの返答に私はどこかで不満を抱えた。キリは多分、遠山とも友達になりたいんだ。いや、違う。キリは何かをやっぱり私に隠してるんだ。親友を疑う自分が惨めでしかたなかった。

後日。

私とキリを動かす本当の悪党の物語は幕を挙げた。それはたまたまテレビをつけた時に流れ出した、いつもとなんら変わらないニュース。マナ・アーティスト魔法使いをとりあつた犯罪のニュースである。なんらかわりない日常耳にすることだ、だが“ソレ”を聞いた瞬間に私は凍りついたかのように、くわえ様としていた食パンを落してしまった。

……馬鹿な。

硬直した私は、ニュースキャスターの耳など届かずに焼死体で発見された少女の顔写真と名前があった。大人しそうな顔に、メガネをかけていかにも清楚という感じのおさげの少女。その写真の下にかかれた名前は聞き覚えが——いや、見覚えがあった。

『北川恵（17）』、次第に覚醒していく聴力は聞き入れたくないとところだけ聞き入れた。『焼死体』マナ・アーティスト『魔法使い』、『成宮第二高等学校の2年生』……つまりは、あの『手紙』だ。

私は落した食パンに見向きもせず通学用の鞆を持って学校へ向かう。なにか、いやな予感がしたのだ。よくわからない確証はなんでもない、昨日の今日。私は徐々に何かにはまってるんじゃないか？ そんな不安感が私を走らせた。

学校の校門前には所狭しと並べられた中継車やマイクを持った朝に見たことがある人たち、学生や野次馬などが入り乱れ一種の戦場であった。まさかここまでの事件とは……！ 管理体制が行き届いたこの町で異常な反応があればすぐに捕まる。だが先週、そして昨日と続いた焼死事件。報道が騒ぐはずだ……！

私は話しかけてこようとした、テレビの中継の人たちを振り払いながら早めに教室にへと走り出す。今回の事件、犯人はやっぱアイツだと思う。遠山王郁……、私自身の酔っ払っていたがアレは酩酊の幻なんかではない。そして、今日発見された焼死体……つまり昨日に焼き殺された後輩の子……！

多分、あの子には確信があったんだ。この前にキリの不注意で遠山が疑われた時——そう。あの野次馬の中にあの子がいたとしたら——？ あんだけ遠山を追いかけていたキリが何故、昼休みは私と昼食を採っていた？ 簡単な事だ、遠山は居なかったんだ恐らく、あの子と呼ばれて。

つじつまは繋がる……遠山があの子を殺した理由が欠いてはいる……だがハッキリしてるのは……遠山王郁は悪党……魔法使いという私とキリの記憶。

……。対して悪事を働いていない、いたいけな少女が焼き払われた……汚い悪党の炎に。

遠山壬郁。アンタが何を考えてるかしらないけど……白状させて突き出してやる……！

私は校舎の塀に手をかけ、そのまま敷地に入る。グラウンド側で朝練に遅刻しそうな部員の通り道、キリに教わった道だ。私はそこを通り生徒玄関前はアナウンサーたちが張っているであろうから……入り口は職員玄関だ。

……。関わるべきじゃないのはわかる。だが、せめて知りたい。
遠山壬郁が何を考えているかを！

私は少しだけ決心してスリッパに履き替え教室を目指した。

遠山涼平は月を眺める事が好きな少年であった。
とおやまざゆへい

闇に絶えず道標とし輝きを放ち人々を導く月。

その柔らかい月光が包む闇を夜という。決って冷たくて、暗くて、悲しいものじゃない。

だから、遠山涼平は月を眺めるのが好きであった。静かなのに、悲しくもない、孤独じゃない……夜という闇も愛していた。

だから、遠山涼平は月を眺めていた。今日に致までの幾夜を。4
6億以上が体験する闇を。

その闇で道に迷わぬよう、優しく見守る月を。

焼け落ち、身が朽ちるその時まで。

遠山涼平は最後まで月を見ることが叶わなかった。

月は雲により隔てられ……

同時に、遠山涼平のあつたはずの道を閉ざした。

「おんにつ、にいさ——ん——！」

赤に照らされる夜に1つの、叫びを響かせて。

＋前編＋
おわり

† 前編 †（後書き）

† 次回予告 †

―― 傷つくのは覚悟していた。

―― でも、傷つけられて。

―― 私は自分を呪うことしか出来なかった。

―― 無力な上に自分が無意味だとわかった。

―― 『悪党』であることにしか生きる意味はなかった。

―― 『悪党』でありつづけることで、『悪党』を狩れた。

―― 誰かの罪を償う気はない。

―― ただ、『悪党』らしく全てを燃やすことが全てであった。

―― もう、甘えられない。

―― 立ち向かう勇気なんかはない。

―― ただ、言えることは……。

―― 俺が『悪党』であること。

―― アイツは『悪党』だと。

繋がる想いは、此方から彼方まで焼き払う紅き紅蓮となり、
火葬如く、悪が悪を葬る。

そして、そして誰かはその悪党の魔法に恋をする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4720k/>

悪党の魔法に恋をして！

2010年10月9日19時16分発行